Osaka University Knowledge Archive

Title	ドゥルーズにとってのライプニッツ主義
Author(s)	佐原, 浩一郎
Citation	大阪大学, 2022, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/87797
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　佐原　浩一郎　）	
論文題名	ドゥルーズにとってのライプニッツ主義

論文内容の要旨

本論文は、ジル・ドゥルーズ（Gilles Deleuze 1925-1995）の哲学において、ライプニッツの哲学あるいは非哲学的な諸理論がどのように配置され、おのおのの位相からどのような作用においてそれとして認められうるかを明らかにする研究である。つまり、ライプニッツ主義がドゥルーズにおいてどのように行使されうるか、ドゥルーズにとってのライプニッツ主義とはいかなるものであるかを描出することがこの研究の目的である。

序章では、ドゥルーズが、概念と個体の一致としてのライプニッツの体系に取り組みつつも、ねじれのあるその体系に備わるもろもろの罠に陥らずにすんだのはどのようにしてなのかを、バディウによるドゥルーズ論との比較を通じて描出する。そして、ドゥルーズがライプニッツ主義として認めている「生成とともにある連続性」を、『襞』における「折る」という行為との連関において検討する。

第一章では、デカルトが異質性を乗り越えるために数学的方法として用いた解析幾何学と、ライプニッツが用いた微分法との差異の肝要な点がどこにあるかを、講義「基礎づけるとは何か」での議論に即して考察する。ドゥルーズからはつねに批判的に論じられるデカルトが、この講義においてはいくつかの点で評価されており、これらの点がライプニッツとの差異を際立たせるのにどの程度効果的なのかを計測する。

第二章では、『差異と反復』において、ライプニッツによる「オルジックな表象」を、ドゥルーズがどのようなものとして提出しているかを示す。そこでは、二種類の言辞、ヘーゲルによる「矛盾」とライプニッツによる「副次的言辞」が問題になっているのだが、両者の差異がどのようなものであり、それによってライプニッツがいかに特徴づけられるかを解き明かす。加えて、『差異と反復』と『襞』とのあいだで、ドゥルーズによるライプニッツの「観点」という概念についての解釈がどのように変更されたかを確認する。

第三章では、まず『差異と反復』において提出されている微分法と理念との連関を確認しながら、微分法の手順の進行における理念のその都度の変化をドゥルーズがどのように説明しているかを確認し、彼がそこからいかにして問題の論理を構築しているかを明らかにする。ドゥルーズが、ライプニッツにおける記号法と結合法のあいだの特異的な物理学的身分である「織物」をどのようなものとして理解しているかについてもあわせて検討する。

第四章では、ドゥルーズが、ライプニッツにおける魂の自由と進歩の道徳を明らかにするために、劫罰に処されたものに対していかなる役割を担わせているかを示す。劫罰に処されたものは、否定的なものの役割を担っているように思われる。しかし、世界の進歩は劫罰に処されるものたちに依拠しているとドゥルーズは解釈している。この解釈にしたがって、劫罰に処されるものたちの本来的な審級がどこに見出されるべきであり、彼らによって最良の世界のなかに非共可能性がどのようにもたらされるのかを明らかにする。

第五章では、ライプニッツ哲学とバロック音楽との厳密なアナロジーをドゥルーズがどのように示しているかを、その意図とともに示すことを目的とする。ここでは、音楽的な諸要素と哲学的な諸概念との対応によってドゥルーズが示唆しようとしているのは、ライプニッツが諸概念の普遍的な編成をそこにもたらそうとしていたのではなく、時代的な編成をつくりだそうとしていたのだというドゥルーズの本来的な狙いを明らかにする。

第六章では、ドゥルーズが新しいライプニッツ主義であると見なしている理論を主題として、これがいかなるものとして現れうるかということを、現代の建築学的実践を介して明らかにする。ただし、バロック建築のなかではすでにバロックの崩壊とネオ・バロックの到来が予感されており、それはライプニッツ哲学において新たなライプニッツ主義が懐胎されているということと類比的である。

終章では、ドゥルーズの前期思想と後期思想との結節点となる『千のプラトー』直後の1980年ライプニッツ講義において、晩年の著作『哲学とは何か』との影響関係を起点として、『哲学とは何か』におけるドゥルーズの概念についての研究に即しつつ、そこでのライプニッツの所在を探る。最後に、ドゥルーズのライプニッツに対する評価とカントに対する評価との共鳴によって、哲学とは何かという問いのなかでライプニッツが新たに語り始めているということを示唆する。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　佐原　浩一郎　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教 授	檜垣　立哉
	副 査　教 授	村上　靖彦
	副 査　教 授	藤川　信夫
	副 査　学外委員	平井　靖史

論文審査の結果の要旨

本論文は、フランスの20世紀の哲学者ジル・ドゥルーズにおける、17世紀の哲学者ライプニッツの影響を、ドゥルーズの思想形成の内実に沿いながら展開・検討したものである。ドゥルーズは、その哲学思想形成期における講義録から、初期の主要著作である『差異と反復』『意味の論理学』において、そしてさらに晩年における『襞　ライプニッツ』とバロックや『哲学とは何か』にいたるまで、ライプニッツ哲学から多大な影響をうけている。従来スピノザ、ニーチェ、ベルクソンの強い影響のもとに語られがちであったドゥルーズにおけるライプニッツの価値を際立たせ再評価した本論文の功績は評価できる。

本稿は序文のほか6章と終章により構成されている。

第1章では、ドゥルーズ初期の講義録である「基礎づけるとは何か」が検討される。そこではデカルトに対し、ライプニッツが微分法を示したことが記述され、この二人の差異の重要な点がどこにあるかが明確にされている。この対比を通じ、ライプニッツにおける現象の秩序において、世界を「表現する」というドゥルーズにおいて重要な主題が取り出されることが示される。

第2章では、『差異と反復』第1章において、ヘーゲルとともに論じられるライプニッツによる「オルジックな表象」を、ドゥルーズがどのようなものとして捉え直したかが検討される。そこでは、ヘーゲルによる「矛盾」とライプニッツによる「副-言」が問題になるが、両者の差異はどのようなものであり、ライプニッツがいかに性格づけられているかが示される。加えて、『差異と反復』と『襞』とのあいだで、ドゥルーズによるライプニッツの「観点」という概念がどのように変更されたかが確認される。「観点」とは世界を現実化するための条件であるのだが、実際にそれを現実化するのは形而上学的な点としてのモナドであることが提示される。

第3章では、ドゥルーズの微分法についての考察を通じて、彼がそこからいかにして問題の論理を構築するのかが明らかされる。まず『差異と反復』において提出される微分法と理念との連関が確認され、その原理的な機能が提示される。そして、ライプニッツによって記号法と呼ばれるものが、『差異と反復』のなかで描かれた微分法にまつわる問題の論理と重なり合っていることが指摘される。

第4章では、ドゥルーズが、ライプニッツにおける魂の自由と進歩の道徳を明らかにするため、「劫罰に処されたもの」という特殊な個体に対し、いかなる役割を担わせているかが示される。まず、世界あるいは命題の純粋な差異を構成するものとしての「非共可能性」について、必然性と偶然性との、あるいは不可能性と可能性との関係が論じられる。ついで、ライプニッツにおいて自由な行為がどういったものかが確認され、「劫罰に処されるものの自由」にドゥルーズが言及すべき理由が考察される。ここでは神への自発的な憎しみが鍵となりながら、解釈者は「非共可能性」という概念と向かい合わされることになる。この部分は最善説をとるライプニッツにおける自由の議論の「裏面」をなすものであり、またさまざまな後期ドゥルーズの「概念的人物」との連関が示されており、さらなる掘り下げや哲学史関連の検討が期待される場面であるが、本論考の考察のオリジナルな点として評価できる記述となっている。

第5章では、ライプニッツ哲学とバロック音楽との厳密なアナロジーをドゥルーズがどのように示すのかについて、その意図とともに提示することが目的とされる。まずバロック音楽における和音と協奏が、ライプニッツ哲学のモナドの自発性ともろもろのモナドのあいだの非-連続に対応していることが提示され、ついで和音のもろもろの種が、快楽から苦痛への各段階に対応していることを、さらに通奏低音には紐帯が、そしてメロディーには外延

がそれぞれ対応していることが論じられる。

第6章では、現代の建築学的実践を、ドゥルーズが新しいライプニッツ主義であると見なしていることを主題として、それがいかなるものであるのかが検討される。まず、『襞』において断片的に繰り返し扱われるバロックの館がどのような建築であるかが、ドゥルーズの記述に即しつつ素描され、その構造的特色の抽出が試みられる。ついでバロックの後に登場することになった新しいライプニッツ主義としてのネオ・バロックにおける建築モデルが具体的に検討される。

終章では、まず、ドゥルーズの前期思想と後期思想との結節点となる『千のプラトー』直後の1980年ライプニッツ講義において、晩年の著作である『哲学とは何か』が明示的に準備されていたことが提示され、ついで『哲学とは何か』における概念についてのドゥルーズの理論のなかで、ライプニッツ主義が大きな役割を果たしていることが論じられる。

全体として、ドゥルーズの内在研究的なものに留まっている部分はあり、より広い文脈への接合が今後期待されるところではあるが、講義録に基づくライプニッツの思想の受容の変遷、前半期の微分哲学におけるライプニッツの影響や、後年、はじめてライプニッツのモノグラフィーを世に問うことの意味などを総体的に検討した論文として高く評価できるものになっている。

以上、論文審査の結果、本論文は博士(人間科学)の学位を授与するのにふさわしいものと判定した。